

## はしがき

— 『NIDS パースペクティブ2』の刊行にあたって—

核兵器が国際政治の表舞台で政治的、軍事的な影響力を持つ存在とみなされるようになって久しい。これは国際政治学や国際関係論、安全保障論といった学術研究の領域において特に顕著であり、核抑止、核拡散、核軍備管理、核軍縮、核セキュリティといった多様な観点から、さまざまな研究が行われて今日に至っている。とりわけ、近年では核兵器をめぐる国際政治上の動向を念頭に、「核時代」という時代区分を論じる研究が少しずつ数を増やしつつある。これには、米ソが他国を圧倒する核兵器を背景に対峙した冷戦期が終わり、核軍備管理・軍縮が成果を見せる中で始まったポスト冷戦期における「核の忘却」の時代から、新たな核の拡散や核テロ脅威の台頭、そして国際政治で再び「核兵器の長い影」が見え隠れし始め、ついには「核の復権」の下で、大国間競争が激しさを増す時代へと移り変わってきたことが背景にある。

昨今では、ロシアによるウクライナ侵攻に際して、力による現状変更の試みとともに公然と核の威嚇が語られる一方で、長きにわたり「核の同盟」であり続ける北大西洋条約機構（NATO）にフィンランドやスウェーデンが加わるなど、核抑止に対する新たな期待や懸念が高まりつつある。北東アジアに目を向ければ、大幅な核弾頭数の増大が予想される中で、2030年代に「3大核大国」の一角を形成すると目される中国や、国連安全保障理事会決議違反である核兵器開発に邁進しつつ、軍事的挑発行動を重ねる北朝鮮のように、透明性に多くの問題を抱えた核兵器国や実質的な核保有国の存在がある。

このように、核兵器をめぐる国際政治や国際安全保障が大きく揺れ動く中で、今後「核時代」がどのような政治的・軍事的変化を遂げ、いかなる国際安全保障環境を生むのかは、今日あらためて問うべき重要な論点であると考えられる。

本書は2023年に創刊第1号が刊行された『NIDS パースペクティブ・シリーズ』の第2号であり、安全保障研究の1つの趨勢である地域研究の視点からではなく、「核時代」をキーワードとする、いわゆるイシュー特化型の研究成果

物である。より具体的には、本書は上述した「核時代」をめぐる今日的な問題認識や論点を軸に、防衛研究所に所属し、核兵器にまつわる理論的・政策的課題や、その境界領域を専門とする研究者7名が議論を重ね、それぞれの専門分野を掘り下げて取りまとめた学術書という位置付けとなる。本書の執筆は一政祐行（編著）、栗田真広、本山功、大西健、前田祐司、有江浩一、吉田智聡が担当した。

「核時代」という膨大な先行研究が存在するテーマを扱ったことから、本書が先達による分厚い知的蓄積に多くを負ったものであることは明らかである。それとともに、本書を通じて、読者の方々に『核時代の新たな地平』を見通すための新たな視点（perspective）を提供したい、との強い願いから、本書執筆者一同が数多くの先行研究を踏まえ、上述した論点に何がしかの学術的貢献をなすべく志したことも申し添えたい。どうか本書に収録したこれらの論考に対して、読者の皆様よりのご批判やご教示を賜れば幸いである。

なお、本書の執筆に際しては、防衛研究所でNIDSパースペクティブ研究会と題して、早稲田大学政治経済学術院准教授の栗崎周平博士、公益財団法人日本国際問題研究所軍縮・科学技術センター所長の戸崎洋史博士という、当該領域で傑出した有識者の方々をそれぞれお招きして、アウトラインと初稿の段階で専門的助言やピアレビューを頂いた。この場をお借りして、栗崎周平先生と戸崎洋史先生からのお力添えに御礼を申し上げたい。無論、本書の内容はそれぞれの執筆者による研究者としての個人的見解であり、もし誤りや至らないところがあった場合のすべての責任は執筆者が負うものである。この点で、本書が防衛研究所、防衛省、日本政府の見方を代表するものではないこともお断りしておきたい。本書における論考が「核時代」に関するさらなる学術的・政策的検討とその発展に寄与することができれば、これに勝る喜びはない。

2024年（令和6年）3月

防衛研究所政策研究部サイバー安全保障研究室長  
一政 祐行